



FLIGHTAGE
COMMUNICATIONS
GROUP
Creative
Magazine

正論

〒100-0001
東京都千代田区千代田1-1-1
〒100-0001
東京都千代田区千代田1-1-1
〒100-0001
東京都千代田区千代田1-1-1
産経新聞社

2006 4 SEIRON

編者 秋山庄太郎「大竹しのぶ」



**中国の対日工作を予言していた
米国防諜官の驚愕証言**
中西輝政

「張作霖爆殺はソ連の謀略」と断言する根拠 デミトリイ・ブロホロフ
中国知識人との対話で分かった歴史問題の「急所」 八木秀次
日本企業を「死の商人」にする中国「軍民一体」の落とし穴 平松茂雄

「衝撃告白」私は中国で人身売買された 李明花／朴ウンミ
ミサイルデータ流出、テポドン打ち上げ ウラジミール
謎の組織「科協」に迫る

【特集】ニートは国を滅ぼすか？
三浦展／兵頭二十八／安藤慶太／北村陽子／喜多由浩

【特集】

皇統を守る、日本を守る

いまこそ皇室の重みに思いをいたせ 渡部昇一
占領政策克服の意志が「男系維持」を可能にする 大原康男
西洋流のエンペラーとはちがう天皇家の特質 松原仁vsさかもと未明
紀子さま ご懐妊に寄せて
篠沢秀夫／麻生千晶／塩田丸男／野口健／芳賀綏／西館好子／竹本忠雄
皇族の口を封じた朝日社説の傲慢と小心とご都合主義 稲垣武



対談

西洋流のエンペラーとは ちがう天皇家の特質

衆議院議員●まつばら・しん

松原 仁



×



漫画家●さかもと・みめい

さかもと 未明

—秋篠宮家のご慶事が昨日（二月七日）宮内庁から発表されました。おめでたいことであり、ご出産の日を静かに待ちたいと存じます。政府は皇室典範改正案の今国会提出を見送るようですが、別の観点から、将来安定的に皇統を維持するための検討はこんごも必要と思われれます。それは秋にお生まれになるであろうお子さまが皇子であっても皇女であっても、変わりありません。本日は、松原さんは立法院の責任ある衆議院議員として、また、さかもとさんは皇室を仰ぐ国民

の立場から、皇室のあり方と皇位継承についてお話しいただければと存じます。

変えてはならないルールだったはずだ（松原）

松原 私は、皇室というのは日本民族の属性のひとつであり、皇室のあり方とは民族が維持してきた、是非を超えたル

ールだと考えます。

最近、改正の方向は今上陛下のご意思だとまことしやかに言われますが根拠はなく、寛仁親王殿下も陛下がそのような判断を口にはなさることは考えられないと否定しておられますので全くの仮定として申し上げますが、今上陛下が「女系天皇も良い」と仰せになられたとしても、変えるべきではないルールがあるはずだと私は思います。

野球に例えれば一塁からホームまで四つのベースがあるのと同じで、これを五つにしたら、それは野球ではありません。また、ローマの司教たるローマ教皇を選ぶコンクラーベ

松原仁氏 昭和三十一年（一九五六年）東京都出身。早稲田大学商学部卒業。松下政経塾、都議会議員を経て、平成十二年の衆院選で民主党公認候補として初当選、三期目。平成十七年七月、衆議院衆院院政問題特別委員会へ元北朝鮮工作員、安明進氏の国会参考人招致を実現した。現在、同委員会筆頭理事。日本の領土（竹島・尖閣諸島）を守るため行動する議員連盟事務局長、拉致問題事務局長代理、党拉致問題対策本部副本部長。

さかもと未明氏 昭和四十一年（一九六六年）年、横浜生まれ。玉川大学文学部卒業。商社でのOL生活を経て漫画家に。代表作は「マンガ／ユング」「心の深層」「マンガ／ギリシャ神話」「講談社」。「ニッポンの未明」①②（扶桑社）、エッセイも執筆し「さかもと未明の美人革命」（大和出版）、「キレイが勝る」（幸せになる美人道）（講談社）など著書多数。平成十二年、「花備」（「文学界」七月号）で作家デビュー。

（「教皇選挙、ラテン語で「親がかかった」の意）は、カトリック教会が何世紀もかけて、他国の干渉を防止し秘密を保持するために培ってきた伝統に根ざしたやり方です。そのコンクラーベで次任教皇を議論するけれども、コンクラーベそのものを変えようということは議論の対象にはならないわけですね。もはや、是非を超えているという認識です。

日本も安定した皇位継承のために考えるべきことはたくさんありますが、ルールの部分は手を加えてはなりません。再び野球に例えるならば、四つのベースは不変ですが、ボールの素材やゲーム上の規格は時代によって変わったりしています。しかし、男系を変えるということはこのベースを五つにするようなものです。改正するならば、本来のあり方である宮家の復活を含めた、皇位を安定継承する議論がいま必要であると感じています。皇室典範に関する有識者会議答申は、根本的なルールを変更しようとしたものであり、私は反対であるという立場を明らかにしておきたいと思えます。もちろん、紀子妃殿下の三番目のお子様は女子なら有識者会議答申はOKだという議論にはなりません。

さかもと そうですね。有識者会議答申は（一）皇位継承は長子優先とする（二）数十年後に、二千年以上の歴史上初の女系天皇誕生を認める——といった内容で、伝統と歴史に背を向けた、拙速にすぎた内容でした。神話から始まり、日本民族が大切にしてきた天皇家の存在について、どうお守り

したらよいのかという議論がなされるべきところを、根底から崩すのではないかと危惧していました。

松原 ええ、まず女性・女系天皇の違いが広く国民の間で明らかになっていません。歴代女性天皇は男系であり、その意味では愛子さまは天皇になる資格をお持ちですが、そのお子様は、皇族ではない者を父に持つ天皇ということになります。この点は重要で、天皇はこれまで、みな父の血筋で天皇と結ばれ、百二十五代連綿と続いてきたのです。このひとつのルールを二千年間にわたって維持してきたこと自体に価値を認めなければなりません。

皇室というのは権威の象徴であり、権力ではありませんでした。日本は古来から神ながらの道を来たのであり、天皇とは日本最高の神官なのです。その神官のルールとして男系が維持されてきたのです。そこでこれを女系に変更することは、日本教の祭主である皇室の伝統を否定することにもつながります。

さかもと 権威と権力を分けてきたから、日本では皇室と民主制が相反するものにはならなかったわけですよ。

松原 そのご指摘は重要なことだと思います。さらに、ここから先は難しい議論なんです。私は日本の伝統文化——皇室を含め——代々日本人が大切にしてきたものは世界に通用する要素があると思うのです。日本では、ハード（形式）にとらわれず、ソフト（精神）を維持するということが昔か

らあったと感じるんですね。日本の許容力ある文化の、難しい表現ですが「主体としての立場」を持ってきたのが歴代天皇ではないかという気がします。

さかもと 私もバチカン市国のお話（コンクラーベ）には非常に感じる所があります。伝統というものを、とにかく人間を押しさえつけるものであるととらえ、それを打ち砕いて自由になっていくことが人間性の回復であるという輩が増えているのが昨今の日本の悪い特質ですが、これはとんでもないことと感じます。

今回は、雅子妃に男児がお生まれになっておらず——愛子殿下は非常に素晴らしい、私たちは夢をかけているのですが——そこに大変なお苦しみがあつたのではないかと同じ女性として思うのです。ただ、妃殿下にお苦しみがあつたこと、それによってこうした（皇位継承の）問題が起きてくること、宮家の廃絶が見込まれて皇室そのものが非常に不安定な状況におかれていることを日本国民に知らしめる一つの意義ある機会だったのでないかと思えます。

皇室に生きる方々は、現代の神話の人物だと思います。そういう方々の身を受けて天は何を言っているのか。それをひもといていくことが大切なのではないかと思えます。

敗戦でさえ途絶しなかった皇統の男系継承を、なぜいま拙速に根本から覆さなくてはならないのか。女系天皇を論ずることは皇室を終わらせようという論議に思えて、非常に危惧

を抱いています。松原先生は国会議員としていかがですか。

松原 僕は、今回の件は、小泉さん（川純一郎首相）の極めて個人に発することだと思えます。もちろん問題意識としては、今のままでは安定的な継承が難しいという意識があるのだと思いますが、それならば、僕は宮家の復活を含め、皇室の伝統をいかにして補強するかという議論をすべきだと思います。例えば、奈良の法隆寺の五重の塔が雨風で壊れかかっていたならば、それは修復すればいいのです。それを建て直して二重の塔にしたら、もう別の存在になってしまおうのです。小泉さんは二重の塔をつくる方向で、しかもこの段階で断行しようとした。彼は「今国会で改正する」と言い続けてきました。覚悟は昨日のご懐妊の報によって対応が変わりつつあり、正常なことと思えます。

小泉さんの場合、郵政民営化は二十年来改革が必要だと言ってきた、しかし皇室典範に関しては――。

さかもと 思いつきで――。

松原 ええ、まさにさかもとさんが先ほど指摘したように、権威を壊していくことが改革であると内心お思いであるのならば、この際改めていただきたいと思えます。

さかもと 私も、小泉総理が本当にこの国のことを思ったださるのであれば、ご自身の任期中に結果を出さなくても「これは国民が時間をかけて議論すべき問題である」と総理のお立場で言っていただけだと願います。

松原 本当にそうですね。今回の議論は突き詰めて言うと、日本にはいかに敗戦後の――日本だけがすべてにおいて百%患者であり、日本のみが犯罪者として永遠に罰せられ続けることは当然であるといった、昭和二十年代の東京裁判史観が空気のようには蔓延してしまっただかということを如実に表していたと思います。主権回復から五十年間、この裁判の違法性に対して日本の主体的な反撃が一切行われなかった、そこに問題があると思います。皇室典範問題は、日本らしさを失うことの総仕上げのようなものです。マッカーサー元帥――日本占領の総責任者だったマッカーサー元帥ですら、これほどまでのことは考えなかった。

国民は、戦争に敗北しても滅びないけれども、政治の敗北によって滅びることがあるということを、まさに地で行くような話でした。

さかもと はい、東京裁判史観をそのまま受け入れて現在に至っているのはほとんどないことですね。日本を骨抜きにする仕上げとしてこういうことが現実となるならば、大変なことです。敗戦のときGHQ（連合国軍総司令部）でさえ途絶えさせなかった皇統を、自国民が途絶えさせようとしているなんて――。

松原 戦後半世紀以上経っていて、政権党は何をやったのかと強く思います。経済発展は結構です。しかし経済より誇りの方が重い。

さかもと おっしゃる通り。

松原 特に東京裁判史観について言えば、日本はサンフランシスコ講和条約で判決 (Judgement) は受け入れたけれど、その裁判の全体像を受け入れることはしていないのです。当然です。こんな、国際法にのっとらない裁判はなかったわけです。国際法にのっとって正式に公平な立場で行うのなら、C級戦犯、いわゆる「人道に対する罪」というのは、原子爆弾を落とした人間にも適用されなければならないはず。今日まで一切それはない。

A級の「平和に対する罪」も後につくられたものであり、当初はB級しかなかったわけです。そういうふうなものを、遡及して(過去にさかのぼって)適用すること自体、罪刑法定主義では否定されることです。それを認めた——われわれは無力だった。本来、日本はドイツと違って、無条件降伏といってもあくまで軍隊の降伏であって、国家としてはそうではないわけです。ここまでするまで、国家としてはそうである権利はあつたはず。しかしそうした議論はその後の政權党において真剣には行われなかつたのかと思います。

少なくとも戦後ある程度経つたとき、早急に見直しが必要でした。(外交史研究で知られる)鹿島守之助さんの名著「世界大戦原因の研究」(昭和十二年、岩波書店)をよく読みましたが、鹿島さんも後に第二次大戦後の東京裁判について「日本の国際法学者に早急に見直しをしてほしい」と述べて

おられるんですね。

だいたい、国際法の専門家と言えるのは十一人の中でパール判事(インド派遣)しかおらず、判事の資格すらない者もいた。

さかもと 法廷の公用語である、英語も日本語も解さない者もいました。

松原 そういうリンチ裁判で行われたものを未だに引きずって検証してはいけません。日本が戦後自信を失っている、その全ての元にあるのは東京裁判による思考停止です。昭和二十年からの思考停止が今も続いているのです。そして少なくとも、その裁判の違法性を議論すること自体がタブー視されている。つまり、まともに思考してはいけないから国の主権やあり方も真剣に思考できない。とにかく自分たちが悪いと信じ込まされている点で思考停止をしている。思考停止をしたまま「男系天皇を否定していいではないか」という発想が出てくるんです。この問題は思考停止した状態で考えるべきではありません。

私は男尊女卑ではありません。女系、男系というのは先に述べた通りルールであり、男系ということですと続いてきたことを強調したいのです。

さかもと どちらが優生であるかという議論ではないんですよ。

松原 その通り。女性の天皇だって推古天皇以来、八方十

代あり、お役目をご立派に果たされたわけですから。

千三百年も前の昔、弓削道鏡という人物が天皇の位を奪取しようとしたことがありました。和氣清麻呂が大分県宇佐市の宇佐八幡神宮へ下り、御神託を奏上して道鏡即位を認めなかつた事件があつたわけですが、それは彼らが天皇制度のルールを理解していた証しです。

道徳教育がなされない国はやがて滅びる（さかもと）

さかもと 最近、ニートが話題になっていきますね。学業もせず、職業訓練も受けず、求職もしていない無業者です。失業者や浪人、主婦、定年退職者は含まれず、日本では十五歳から三十四歳だけで六十三万人いるという統計もあります。心の芯として抱くものがないというのは私も経験から理解できるのですが、先般の堀江さん（『貴文ライブドア社長』）

が逮捕された事件や、こうしたニート増加に共通する問題は、きちんと真面目に働く、損をしても立派に生きたい、だれが見ていなくても品位だけは保ちたいということが全く教えられないことの結果だと思ふのです。道徳教育——人の生きる道を教えるというのは、非常に重要なことだと思ひます。その根幹として、日本には神道があつたと思ふのです。

先の大戦を振り返りましても、親や郷里の家族のために、命を投げ出して戦おうとした男たちがあれだけいた、というのは世界に類をみないと思ふのです。それが間違つた方向であつたという意見もあろうかと思ひますが、そうした勇氣、大切な者を守るという勇氣を私自身は持てるだろうかとか考へたとき、私は弱かつたころの自分を思い出します——登校拒否をしたり、働くことをしなかつた時期もありました。そのとき自分はなんでこんなに弱いんだろうと考へました。信念というものがなく、お金のために働く、良い仕事を得るために大学進学するという言葉にすっかり元気をなくす子だ

つたんです。

ニートに対する厚生労働省の施策は、若者に敬遠される三K（きつい、汚い、危険）の職をさせないとか、企業に高給を出してほしいとか、良い職に就くために良い教育を与えようといったものが柱ですが、自分の二十代を振り返りながらニートについて考えますと、大切なものが抜け落ちていく気がするんです。

松原 国民の多くが拝金主義者になっていっているんでしょね。本来、唯物論的ではなく精神性のつよい日本において拝金主義にするというのは、米国の終戦当時の対日国家戦略にあつたのではないかと思えます。拝金主義となると精神的なものよりも物質的なものが上位にきます。アメリカナイズされるというのはそういうことです。トックピルの書物をもても分かるように、米国は雑多な民族が集まって国家を形成し——もちろん自由や平等もモチーフとしてはありますが——個人がお金を持つが故に生活の安全保障を確保するといった意識は、極めて強いわけです。そうしたことがまさに米国の民主主義の基盤にあるという事は、すでに十九世紀初期の社会学者によって証明されています。

それが戦後日本に入ってきて、否定された精神主義にかわって王座に座った。

そうした議論と同時に考えなければならぬのは、国家と個人の関係ですね。国家と個人との関係は、プラトンの「国

家」では「国家は大文字の個人である」と説かれています。

つまり、個人と国家の相似形で——これはホッブスほか多くの政治思想家が分析していますが——自信のない個人が集まって自信のない国家となるのか、それとも自信のない国家だから自信のない個人が生まれるのか。それは卵とニワトリの関係の相関性があるわけです。

身近な例では「自国の旗を掲揚してはいけない」とか「国歌を歌ってはいけない」と教育された子供が、果たして国家に対して自信を持つだろうか。国家に対して自信を持たない子供が、自分に対して自信を持つだろうか。教育の根本問題にはそれがあり、ニート問題につながると私は思います。

お金以外の多元的な価値尺度をわれわれの社会は子供たちに提示していない。その多元的な価値尺度の中にあるのが、外交における国家の存在なんです。

われわれがモノを考えると、人間の姿を求めてとらえます。法人といえは法の間人です。われわれはすべて人格的存在として物事をとらえるというのは生物学上の特性だと思えますが、そうした意味で、われわれが国家を人格的存在としてとらえるのは、外交なのです。外交において、国家というものとは人格的存在として表出してくるわけです。

その人格的存在である国家が、あの東京裁判を受け入れ、自ら思考せず、反論しない国家になったわけです。個人だったら、自ら思考せず、反論しなければ社会の中でどういふ個

人になるだろうか。そんな個人に、日本は国際社会でなつてしまったのです。

その延長線上に、中国に何を言われても黙っている、北朝鮮に何を言われても黙っている、ほかの国に何を言われても黙っている、そんな国になつたわけです。もちろんその原点は、一方的に、罪刑法定主義によらず勝者が敗者を裁くためのリンチ裁判である東京裁判をいまだに黙って認めていることです。

これは、黙ることの美德ではないんですよ。われわれは何も言わず、中国からああだこうだと言われれば「すみません」と謝り、慰安婦だ強制連行だと言われればなしてある。強制連行などなかった。国内法に準拠した徴用に反発した人間を刑務所に入れるということはあつたけれども、強制連行して強制労働させたということは、論理的にもあり得ない。それなのに言われても反撃しない。そういうことを目の当たりにしていたら、日本の子供たちは自信を持ってないと思いません。

そうすると、唯一の価値尺度は金しかないわけです。

さかもと そうなんですすね。

松原 個人が、国家と無関係に自らを保全し、安全を保障するには金しかなくなるわけです。国家がしっかりしていて、世界の他の国々に対してモノを申す国家であれば、金以外の価値尺度を持ち、自分の命を捧げようと思えるはずで

す。今の日本を見ていけば、「この国に命を捧げるなんて意味がない」と思ってしまう人が多くなるはずですよ。

日本もかつてそうだった。それが骨抜きになって今日に至つた。その結果が皇室典範問題であり、今回の改正問題は、戦後六十年の極めてシンボリック（象徴的）なことだと思ふんです。

さかもと 多元的価値観、その通りです。多様性を言うときこそ、私たちの心には芯が必要ですよ。

松原 そうです。金銭を求めるとするのは、資本主義のダイナミズムにおいて当然必要だけれども、その一元的な尺度しかなかったところが戦後問題だつたと思います。守銭奴的金銭主義しかない者に対して多元的な発想を提供すべきであるというのが私の考えです。

さかもと 米国では、もともとカルピニズム（神を絶対として信仰するカルバン主義）の勤勉主義が素地としてあつて、それに経済が加わって金を得ることが目的化され、米国の成功方程式となつたという話を聞いたことがあります。

米国はキリスト教の価値観が根強い国ですが、それに対して日本はどうなのか。やはり（信仰の部分が）骨抜きにされて今日に至っていると強く感じます。祖父の世代、苦勞して生きて「俺はやらなくちやいけない」という仁義や信念を持った世代をみてみると、その感性の根源にあるものは、私は父を求める心だと思ふんです。

人生、生きていればさまざまな苦しみがあります。親子関係にしても、誰もがきつと不全感をもっていると思います。願うほど豊かな暮らしではなかった、学費を出してくれなかった、あるいは逆に孝行する前に不幸にも亡くなってしまった、あるいは父親が大酒飲みで母親をぶってばかりだったといった経験などから、尊敬したいけれどできない父や自分の中ではこうあつてほしかった父がそれぞれに存在するんだと思います。

一方で、自分が年齢を重ねてみて「ああ、俺の親父よく頑張ったよな」という父の姿もきつと思えます。みんな、いろいろな父を胸の内に持っているんだけど、やはり私たちは人間だから、理想父たるものになりきれない自分がそこにいます。

そんな中、天皇とは国民にとって、神の道に鑑みどう生きるかを知らしめる指標だったのではないのでしょうか。かしこむべき天皇の前では己など実に小さい存在である。人知を超えた理に対して畏れかしこむ気持ち、個人をして勇氣ある存在にして、神話的な勇氣ある行動に駆り立てる力を与えてきた気がします。

正当な解釈ではないかもしれませんが、そういう部分があったと思うんです。

一神教の一つであるキリスト教と、神道という体系で最高位の神官であられる天皇と天皇制度を対極のものとして比す

ることは決してできませんが、日本においては天皇后西宮陛下が、西洋國家におけるキリスト以上のものを持って、大きな存在として、父性、あるいは母性の根源のようなものとして國民から求められていたのではないかなと思うのです。

世界に誇る日本、その核が皇室である（松原）

松原 米國も変容してきて、大衆化してきましたね。カルピニズムのときは倫理的に高かったと思います。そこを離れた大衆文化が米國にも出てきていると思います。

さかもと そうですね。現代のセレブブームもまったくそうだと思います。米國初のネットワークビジネスも、根本的にそういうところがあると思います。

松原 真面目に働いて金を儲けるか、それともそうでなくして、という部分ですね。つまり、シェイクスピアの「ベニスの商人」にあった（慈悲の心もなく借金を返済させるために肉を切り取るうとした）ような、倫理観とは別の純商業的な発想が世界に蔓延してきていると感じます。

世界の文化はおしなべて下品になってきていると思います。

米國の文化が戦後流入してきた中で、日本が大切にしていた伝統を台無しにしてしまっているのか。そう思うわけです。

私は松下政経塾の出身ですが、松下幸之助さんが「人間を考ふる 新しい人間観の提唱」(PHP研究所、平成七年)の中で「天皇家の存在は大きい。このシステムの中心主である」といったことを書いています。つまり、天皇家の脈々とした歴史があつてこれが柱として存在しているが故に、遣隋使の時代は和魂漢才、明治維新では和魂洋才などと、他文化の吸収に鷹揚なたいへん許容力をもつたわれわれの文化が続いてきたということです。仏教すら容れたんです。神仏習合です。

神道は今日においては日本固有のもですが、固有のものであるというだけでは神道の説明は不十分だと思います。

あのような素朴な許容力のあるアニミズム文化はかつて全世界にあつたと思うんです。それが一神教の猛威の前に全部放逐されていったんではないか。たまたまそれがフアーイースト(東の果て)、極東に残ったんです。それはきわめて偶然の奇跡的な事柄だったといえます。

つまり、神道的なものは、かつて全世界にあつたと思います。その点では、世界人類共通の精神的土台を形成するものが、神道というものではないでしょうか。

さかもと そうですね。ローマだって、ギリシャはもともと多神教ですものね。そういう、天然自然の森羅万象に霊的なものを認めて信仰するアニミズムに似た、人間の根源的な部分ほどの民族にもみられたのに、一神教になっていっちゃ

つたんですね。

松原 一神教は強いから。

さかもと そう。強い。日本の文化も、他をとり入れながら日本流にしていくという見えにくい強さをもっています。でも他を認めない一神教には負けてしまうでしょうね。

松原 肉食動物と草食動物のようなもので、食われちゃうんだ。ここは周りが海だったから良かったのかもしれない。

そのシンボルとして、その最高の祭祀として天皇というものが脈々と存在してきた。ところで今日、世界の経済活動が一層緊密になり情報伝達が容易になってくると、世界共有の価値尺度として人間観が必要であるとも私は思います。つまり、世界それぞれ価値観も習慣も違う、しかしそんな中でも共通の普遍言語、最低限の人間観の共有がなければ、地球という有機的な社会や経済や平和は存在し得ない面があります。昔は古代ギリシャのあとに、アレキサンダー大王の東征のち、広大な国家と経済が交流し、ヘレニズム文化の全盛期がやってきました。今日はそれよりもはるかに深い意味での二十一世紀のヘレニズム文化の到来を迎えていると言えます。そして今日の融合文化を構築する上の触媒になり得る人間的な要素というのは、まさに和魂漢才あり、和魂洋才あり、すべてのものを許容し得る柔軟な、寛容な日本なのではないかと思えます。その寛容さの理由の一つに、逆説的ですが脈々と続いた天皇家の存在があると思うのです。

さかもと 結局「制度を守る」と言いつつ原理を破壊しようとしてるのが今回の皇室典範論議ですよね。

松原 まさにおっしゃる通り、原理の破壊ですね。原理を破壊しておきながら制度を守るといふのは本末転倒ですね。

さかもと 「全然違うものができますよ」という話ですものね。こんな危険なことが白昼堂々とまかり通ろうとしている国家というのは、判断力を失っていると思えません。

松原 よほど自信がない間なんでしょう。伝統に対しての自信の喪失が、ここまで来てしまったのかと思います。

有識者会議座長の発言に「歴史を考慮しなかった」というのがありました。歴史と伝統そのものと言える天皇家について考えるのに歴史を考慮しなかったというのは一体どういうことでしょうか。経済の専門家が「経済のことを考えずに経済政策をつくりました」というのと同じで、自家撞着の発言なんですよ。

それを小泉さんは面白い人ですよ。少なくとも郵政問題については小泉さんは二十年前から主張していますが、この問題は今まで触れたこともなかった。それをどうしてこんなに意地になってやりたがっているのでしょうか。摩訶不思議です。

さかもと 昔だったら、皆さん不敬罪ですよ（笑）。私どもマスコミの人間も気をつけなくてはいけないことです。が、天皇家に対し、かしこみ申し上げるといふ気持ち、畏れ

多いという気持ちも失ってはいけないと思います。

隠されていて、畏れられていくべきだと思います。

松原 民主党内にも伝統を守ろうという大原則のもとに勉強会が旗揚げしました。五十人集まりました。

さかもと 多いですね。一方で皇室典範を政争の具にしてはなりません。

松原 二千年の歴史というのは皇室典範がある前からの話ですからね。皇室典範は明治以来、たかだか二百年です。その前の日本人が感性の中で守ってきたものを、現代を生きるわれわれは、やはり付度しなくては。

さかもと その案晴らしさを、周囲にどう説明したらいいのかといつも考えあぐねます。私たちの世代は、松原さんがおっしゃるような東京裁判史観が蔓延して——。

松原 やはりこれだけ皇室典範論議が盛り上がった背景として、戦後日本の精神構造の歪みを解き明かすために、東京裁判に関しては論議したいですね。

東京裁判が違法なことを当時の日本の知識人はよく分かっていた。例えばサンフランシスコ講和条約の十一条にある判決を受け入れるという部分ですね。あれは灰色で、判決を受け入れたということは内容を認めたということだろうという人もいます。でも私は違うと思う。あの当時、日本はあれが一杯の抵抗だったんです。当時、実際に敗戦して占領されていたのであり、判決は受け入れざるを得なかったが裁判は

受け入れられないという。

先日、私は国際法学者の方に「少なくとも、日本の国際法学者はこの東京裁判見直しのために複数で立ち上がったたり、議論を巻き起こしたことが戦後六十年間であったのだろうか」と言いました。そうしたら「何を言ってるんだ。政治家のあんたの仕事だ」と言われましたが、私は、学者が唯々諾々として国内であの裁判の違法性を取り上げていないというのは、慚愧に堪えないのです。

日本は敗戦でも心を失わなかった（さかもと）

さかもと 確かに、戦後のご皇室から過去に思いを馳せますと、一神教が広がる中でも日本では神道が脈々と根付いてきたことに思いをいたします。皇室は、伝統として守り抜いてきた、世界の唯一の家庭です。

松原 守られてきたのは多くの偶然、多くの要素が重なった結果でもあります。しかし何よりも日本の先人たちが八百万の神々といった上着の伝統を守ってきたからです。

西洋流から言って、神道は宗教ではないと蔑む言い方もあります。彼らは、宗教の三要素を――。

さかもと 教典がある、タブーがある、教祖がいる――。
松原 ええ、かれらはそれが神道にはきちんとないと言います。でも逆に私は、日本土着の神道というのは宗源、つまり宗教の源であり、宗源にずっと携わってこられたのが祭主としての天皇家であるということを思うわけです。ここを認識しないとけません。西洋流のエンペラー（皇帝）とは違うところから啓蒙していかなくてはなりません。

さかもと エンペラーは権威と権力を合わせたものですね。一神教の君主においては国の存立の過程で戦争があり――。

松原 日本の場合で言いますと、われわれは大東亜戦争と

呼んでいる、米国は太平洋戦争と呼んでいるあの戦争は、マッカーサー元帥が「あれは自衛のための戦争だった」と言っているわけです。彼らは自衛のための戦争を、国家存立の手段として認めています。「日本が戦争に突き進んでいった動機は、大部分が安全保障の必要性に迫られてのことだったのです」。これは大変なことです。

マッカーサー元帥は終戦直後は言わなかったけれども、帰米直後に上院聴聞会で証言しました。非常に本質的なことです。

さかもと 朝鮮戦争へ急派されて、日本防衛に責任を負ったとき初めて、アジアにおけるその地政学的な位置を認識したわけですね。

松原 あれはチンギスハーンがやったような侵略目的の戦争ではなかったのです。

むしろ私は、今回の皇室典範問題は慎重に議論するだけではなくて、いい機会だから祭主としての天皇制度の原理をいかに維持できるのかということ、日本文化の特色も踏まえつつも胸を張って世界に対して堂々と議論すべきだと思います。

さかもと 具体的な政策は、先ほど宮家の復讐をおっしゃいました。

松原 われわれの多くは核家族の社会に住んでいます。いろいろな家族形態があつて、現代の社会は核家族です。しか

しそれを善悪を含めてとらわれないのが天皇家です。天皇家を核家族的な発想でとらえるのではなく、大きくくり——天皇一族でとらえなければいけないと思います。

さかもと 竹田宮の二子孫がご本を出されましたけれど(竹田恒泰著「皇族たちの真実」小学館、平成十七年)、血のスペアという言葉はすごい言葉だと感じ入りました。下々の者のなかには人間的ではないという発想があるかもしれませんが、彼らが「私どもは血のスペアである。存続し天皇家をお支えしていくことが使命である」というお気持ち、宮家が廃絶された後も脈々と持ち続けておられるところに感銘を受けました。竹田さんはまだお若いのに素晴らしいことですね。旧宮家の方々は、私どもの存じ上げないところで、神事を行って下さっているというお話を伺います。伊勢神宮の北白川道久・大宮司、神社本庁の久邇邦昭・統理のように、公的な立場の方もおられます。

松原 ええ、われわれの価値観で判断してはならない命脈であると思います。

昨年(平成十七年)から伊勢の式年遷宮が始まりました。二十年ごとに、大御神さまが今までお鎮まりになっておられたお社をこわし、あらたに隣場所に建て替えて、新殿へのお遷りを仰ぐ祭典を行うわけです。

これは経済学者シュンペーターの言うところの創造的破壊ですが、大変なものです。では、何を伝播するのか。西欧で

あれば石造りのバルテノン神殿そのものを維持し伝承することが文化です。また他の文化的建造物はその建物のハード自体を必死に維持しようとしません。しかし伊勢の場合は、例えば内宮そのものではなく、内宮を作るソフトを伝承するんです。二千の部材を代々継承して、日本の国体の中心と言われる伊勢の建物自体を空にするんです。建物そのものの物質としての存在や姿といったハードより、より本質的なもの——つくり方とつくられていた設計図——ソフトを維持するので、そこに日本文化というすさまじいダイナミズムが存在するわけです。だから和魂漢才も和魂洋才も精神的な混乱がなくスムーズに受け入れられたのです。

さかもと まさにそうです。戦争の後、われわれに残されたものはなにか。空襲の焼け野原ではない。もともと日本にあった根源的なものは、何者にも奪われなかったのです。恐らくそれが戦後復興を支えた。

松原 つまり、ハードではなくソフトなのです。そして日本が継承してきた——伊勢の式年遷宮と同じようにと言いますと語弊がありますけれども——天皇の男系継承もそういう重要な要素なんです。

だからそれを否定するということは、あつてはならないんですね。

さかもと 否定しては日本国の解体ですよ。明治に東宮御所として建設され「赤坂離宮」と呼ばれてきた迎賓館（東

京・元赤坂）も、ネオバロック様式の壮麗な洋風建築は素晴らしいですが、本来なら、和の美を各圖の元首や首脳に堪能していた外交の舞台として存在してほしかったです。

松原 そうなんです。われわれ（国会議員）も元且に宮中に参内しますとき、天皇陛下は和装ではなく洋装でお出ましになるのです。やはり伝統的なお姿を拝見したいと、議員同士で漏れ、話します。見方によっては、これも先ほど述べたように和魂洋才なのですね。

われわれはどこから来たのか。そしてどこへ行くのか。それを考えるときに来ていると思います。本来はもっと早く取り組まなければならないと思います。

私は最終的に、今般の皇室典範は改正すべきだと思えます。祭主としての天皇家における男系がいかに安定的に維持できるかという観点から改正をし、同時にこういったものを含めて、われわれのルーツをさぐり、われわれが誇るものは何か、過去の先人の名譽はなにか、後世のわれわれの子孫が誇るものは何か、考えるときだと思えます。

英國の保守政治家、エドモンド・バークが説いた「政治は現代のわれわれだけが行うのではない。過去のわれわれの先祖と、後世のわれわれの子孫と二つの世代がともに行うのだ」という言葉の重みをわれわれは考えて国会で議論しましょう。

さかもと ありがとうございます。